

〔課題演習抄録〕

「気づき」の質を高める生活科学習指導の一考察 -1年生生活科学習での実践を通して-

前 岡 沙 瑛

Sae MAEOKA

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

キーワード：気づきの質，生活科学習

1 研究の目的

平成29年3月に公示される「学習指導要領解説・生活」では、「前回改訂において、気づきの質を高めることが示され改善の方向に向かいつつあるものの、具体的な活動を通して、どのような思考力等が発揮されるのかなどについて十分に検討する必要がある」と示された。まだ「気づき」の質を高める授業は十分ではない。

また、子どもの質的な「気づき」の高まりを具体的に示した研究は多くない。以前生活科の授業を参観したが、「気づき」の質が高まっていたか、自分の判断で見とることができなかった。

本研究においては、質的な「気づき」の高まりを具体的な子どものすがたで明らかにすることを目的とする。

2 研究の計画

宗像市立N小学校第1学年30名を対象とし、単元「しゃぼんだまであそぼう」と単元「あきみつけ」の授業実践を行った。その時児童が書いたプリントや絵、ビデオから気づきの質がどのように変容したかを分析・考察する。

3 研究の内容

(1) 先行研究

今回の学習指導要領の改訂では、「気づき」を「対象に対する一人一人の認識・児童の主体的な活動によって生まれるもの・知的な側面だけでなく情意的な側面も含まれる・次の自発的な活動を誘発するもの」と定義している。

生活科の「気づき」について、高橋・松尾(2014)

は、「気づきは、対象に対する一人一人の認識であり、児童の主体的な活動によって生まれてくるものである。(中略)子どもは、気づきを得ることによって、主体的に対象へのはたらきかけを変えていく。気づきをもとに働きかけを変えて、かかわりづくりのプロセスとかかわりの良さを学ぶのが生活科の特質であるといえる。」と述べている。

また沼沢(2015)は「気づきはあることに対する新しい見方・発見のように捉えがちであるが、低学年児童の場合は、自己の生活体験からの経験・知識と現実の事実との違いから生まれる「はてな？」という「問い」のかたちが入り口となっている。つまり、分かったこととしての気づきではなく、「どうして？」という疑問の「気づき」を身につけなければ、その過程のない結果としての「知識・出来事」を覚えるという形での気づきの定着が図られることになる。」と述べている。

(2) 段階的な「気づき」の質の高まり

先行研究より、「気づき」の質を高めるためには、何度も同じ対象にかかわる単元構成や、困ったことや疑問に思ったことを最後の振り返りで書かせること。さらに書かれたことから教師が児童の疑問や困難を把握し次の時間に発問として投げかける手立てが必要であると考えた。

そして「気づき」の質の高まりは①「確認」(まだ自覚されていない直感的・感覚的な物事の捉えを、自覚させる段階。この段階での気づきはまだ個別的で、対象について自分なりに事実を捉えている。)②「整理」(自分なりの考え方として整理され、次の活動の行動の基盤となる。体験や話し合い活動の中で気づきの捉えなおしや比較・関連付けて考えることができる。)③「試行」(他の物にも応用できる。意図的に試すことができる。)④「再整理」(「やっぱり対象は～だ」ということができる。対象と関わる中で自分自身の成長に気付

く。)と段階的になっていると整理した。

(3)「しゃぼんだまであそぼう」の授業実践

表1 単元「しゃぼんだまであそぼう」の概要

対象	宗像市立N小学校第1学年30名
日時	6月28日(水)5限,7月12日(水)3・4限
単元名	「しゃぼんだまであそぼう」
主眼	○しゃぼん玉を作る道具は身近にある物を工夫し作れることや、しゃぼん玉の不思議さ面白さに気付くしゃぼん玉遊びを楽しむことができる。 ○自分自身で考えた工夫や活動を通して、感じたことや気付いたことなどを、進んで交流することができる。

第1次には、ストローでしゃぼん玉遊びを経験させた上で、しゃぼん玉の不思議さや面白さを実感させると同時に、大きなしゃぼん玉を見せることで児童のもっとやってみたい、工夫したいという意欲を高めることをねらいとした。第2次では、自分の作りたいしゃぼん玉を様々な道具で作ることをねらいとした。前回のワークシートの振り返りを行い、作りたいしゃぼん玉を考えさせることで目的意識をもたせてから活動に入った。活動は児童の気づきを広げるために、モールや段ボール、など身近な材料を用意した。また、振り返りのワークシートに書いた記述は、次の時間全体で共有する時間をとった。また振り返りのワークシートには「困っていること」を記述させることで、教師が児童の思いや願いを把握するとともに問題発見や問題解決の活動につなげることで気づきの質を高める働きかけを行った。

(4)「あきみつけ」の授業実践

表2 単元「あきみつけ」の概要

対象	宗像市立N小学校第1学年30名
期日	11月15日(水)3限,11月22日(水)2限,11月29日(水)3・4限,12月6日(水)1・2限
単元名	「あきみつけ」
主眼	○自分の遊びを紹介したり、一緒に遊んだりすることで進んで友達と関わろうとしている。 ○自分で作ったものをクラスの友達で紹介したり、一緒に遊んだりすることで、みんなで遊ぶ楽しさに気付くことができる。

指導にあたっては、作りたいものが同じ児童同士でグループを作り、友達と共に作ったり遊んだりすることで、互いの気づきを伝え合うようにした。最後に「あきのおまつり」を設定することで、友達と協力して自分たちの力で遊びを創ったり工夫したりする楽しさを実感しながら、自分や友達のアイデアや工夫等のよさに気付くようにした。

振り返りのワークシートには「困っていること」も記述させた。またお店をひらくにあたって必要な材料を考えさせることで見通しを持たせた。

また気づきの質の高まりを見取り、それぞれの段階に適した声掛けを行うようにした。

4 成果と課題

(1) 単元「しゃぼんだまであそぼう」

授業記録をもとにD児の気づきの質がどのように高まっているかを分析した。D児は一人で行動したがる子どもである。今回D児は道具を変えたり、使い方・吹き方・動かし方を繰り返しながらより自分の作りたいしゃぼん玉を作るために試行錯誤を行っていた。今回子ども同士の相互交流も影響した。友達との会話を通じて気づきを得ることで新たな試行錯誤を行っていた。

D児の気づき質の高まりにおいては、行きつ戻りつではあるが、④「再整理」に差し掛かっている姿を見ることができた。

気づきの質をさらに高めるために、使用する道具を吟味すること、また小集団での交流の在り方、場の設定が課題としてあがった。

(2) 単元「あきみつけ」

授業記録をもとにS児の、気付きの質がどのように高まっているかを分析した。S児の気づきの質の高まりにおいては「しゃぼんだまであそぼう」では①「確認」で終わっていたが、今回③「試行」に差し掛かっている姿を見ることができた。今回グループで活動を行ったことと、「あきのおまつり」を最後に設定することで、他者を意識させたことが効果的であったと考える。友達に楽しんでもらうために、もっとより良いものを作ろうと友達と話し合い、試行錯誤する姿が見られた。

学級の児童は全体的に「作ること」に対しては、気づきの質が高まっていた。しかし「遊ぶこと」「売ること」に対しての気づきも児童から出てきていたが、教師が視点として持っていなかったため、気付きの質の高まりを捉えることができなかった。課題として、気付きの視点の教師自身が整理すること、気付きの質の高まりにおける段階的な声掛け等の支援をさらに吟味すること、児童の意欲付けの工夫があげられる。

主な引用・参考文献

- 松尾憲雄・高橋泰郎 2014 対象とのかかわりを深める子どもを育てる生活科学学習指導
文部科学省 2017 小学校学習指導要領解説・生活(平成29年3月公示)
沼沢清一 2015 生活科において気づきを高める教材の開発